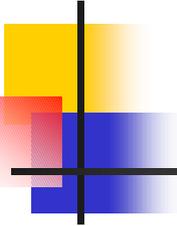


# 環境測定分析 統一精度管理調査について

(平成16年度環境測定分析  
統一精度管理調査結果説明会資料)

環境省 環境管理局

総務課 環境管理技術室



# 目次

---

1. 調査の目的
2. 調査実施体制
3. これまでの取組
4. 調査のあり方に基づく取組状況
5. 平成17年度調査計画
6. 調査スケジュール

# 1. 調査の目的

- 環境測定分析の信頼性及び精度の向上
  - 調査実施サイトの視点
    - 分析機関におけるデータのばらつき実態を把握
    - 分析手法の特質等を検討して、分析手法、分析技術の改善に貢献
  - 調査参加サイトの視点
    - 自己の分析技術の確認・向上の契機
    - 分析技術ノウハウの蓄積・情報交換など
- 各分析機関の評価、格付け等を行うことは目的としていない

# 調査の位置づけ

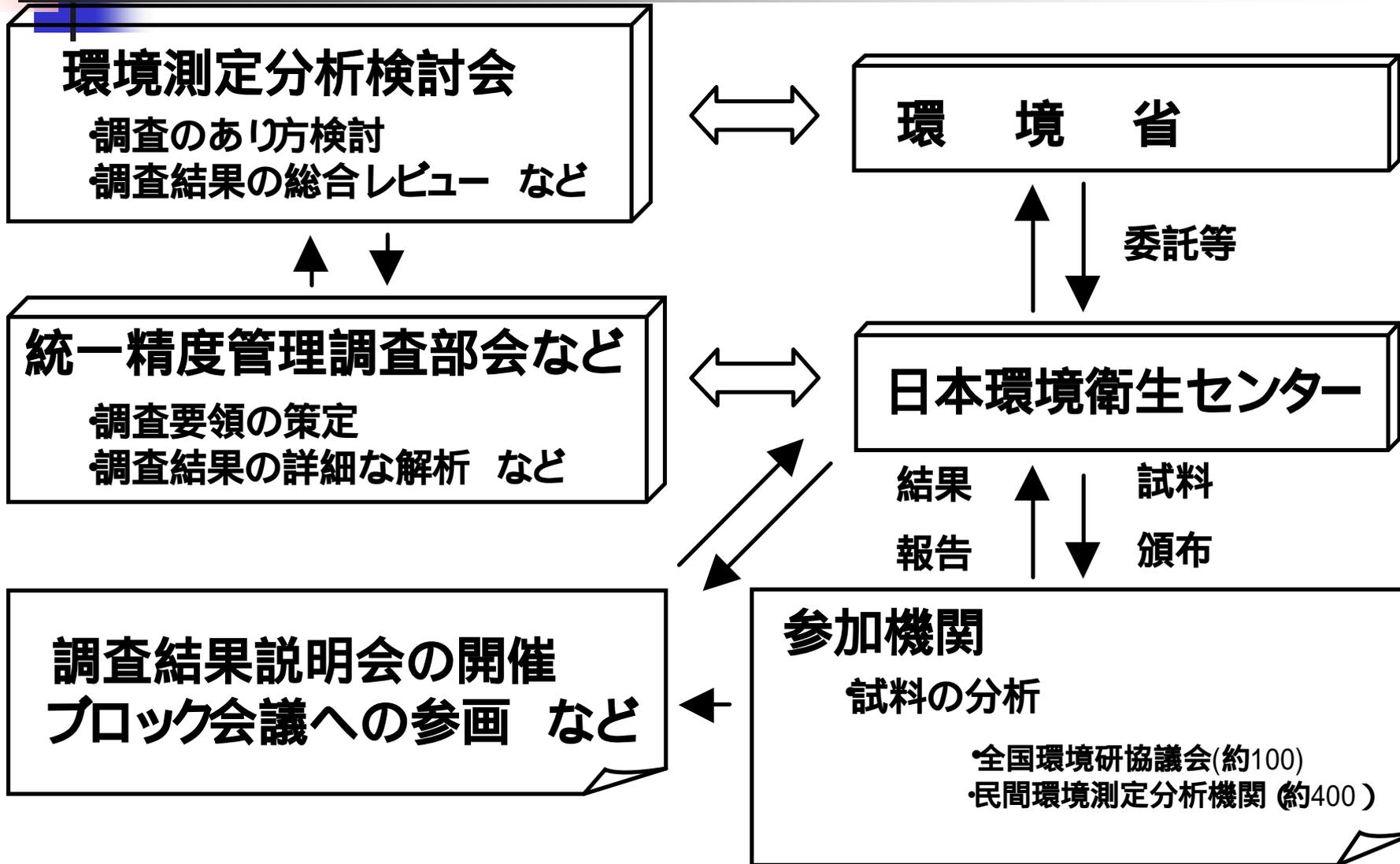
## ■ 内部精度管理

- ・組織 品質管理システムの整理
- ・文書 記録の保管
- ・内部監査 等

## ・外部精度管理

- ・外部監査
- ・分析所間比較試験
- ・ブラインドテスト 等

## 2. 調査実施体制



## 3. これまでの取組

- 昭和50年から調査を実施
- 多様な分析試料を対象とした調査
- 公募により多くの分析機関の参加
  - 公的機関(約100機関)
  - 民間機関(約400機関)

# 過去3年間の調査実施試料

MOE

14	土壌試料	土壌	Cd、Pb、Hg、
	模擬水質試料	メタノール溶液	ノルフェノール、4-t-オクチルフェノール、4-n-オクチルフェノール、フタル酸ジ-nブチル、 インドスルファン、エチルベンゼン、塩化アリル、塩化ビニル
	模擬大気試料	窒素ベース	ベンゼン、トリクロロエチレン、テトラクロロエチレン、ジクロロメタン
	ばいじん (ダイオキシン類)	ばいじん	ダイオキシン類及びコプラナ PCB (異性体、同族体)
15	模擬排ガス吸収液 試料	水溶液	SO <sub>x</sub> 、NO <sub>x</sub>
	模擬大気試料	人工空気ベース	ベンゼン、トリクロロエチレン、テトラクロロエチレン、ジクロロメタン
	底質試料	海域の底質	フタル酸ジエチルヘキシル
	土壌試料	土壌	鉛
	土壌試料	土壌	ダイオキシン類及びコプラナ PCB (異性体、同族体)
16	廃棄物試料	下水汚泥の焼却残渣	Cd、Pb、As
	模擬ガス試料	人工窒素ベース	臭気指数
	底質試料	海域の底質	フタル酸ジエチルヘキシル
	土壌試料	土壌	ダイオキシン類及びコプラナ PCB (異性体、同族体)
	模擬水質試料	メタノール溶液	ベンゾ(a)ピレン、ベンゾフェノン、4-ニトロトレン

## 4. 今後の環境測定分析統一精度管理調査のあり方 (平成14年7月) に基づく取組状況

- 調査項目に関する長期計画の策定
- 情報システムの開発
- 解析・評価の高度化
- 室内精度の向上に向けた取組
- 調査結果の公表
- 調査結果の信頼性の確保に向けた取組
- 外れ値のフォロー

# 調査計画

		平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度
基本精度 管理調査	水質・地下水 試料	COD、全燐、 全窒素 (模擬水質試料)				金属類、農薬等 (模擬水質試料)	
	土壌・底質 試料		金属類 (実試料)				栄養塩類 金属類 (実試料)
	大気試料			NOx, SOx等 (模擬大気試料)			
	生物、その他 試料				金属類 (実試料(廃棄物))		
高等精度 管理調査	水質・地下水 試料	要調査項目、フタル酸エステル等 有機化合物 (模擬水質試料)		要監視項目、要調査項目、 フタル酸エステル等有機化合物 (模擬水質試料)			
	大気試料	有害大気汚染物質 (模擬大気試料)等			有害大気汚染物質		
	土壌・底質 試料			フタル酸エステル等有機化合物、 ダイオキシン類等 (土壌・底質試料)		フタル酸エステル等有機化合物 等	
	生物、その他 試料	ダイオキシン類 (ばいじん試料)					

平成17年3月環境省発表の「化学物質の内分泌かく乱作用に関する環境省の今後の対応方針について - ExTEND2005 - 」により、内分泌かく乱作用を有すると疑われる化学物質のリストが廃止され、今後は必要に応じて「化学物質環境実態調査」の中で環境中の残留実態の把握を行うこととされたため、本表における標記を「**内分泌攪乱物質等**」から「**フタル酸エステル等有機化合物**」に変更。

- 平成14年9月に開設した統一精度管理調査専用のホームページ (<http://www.seidokanri.jp/>) を用いて、精度管理に関する情報の掲載、参加機関の募集、分析結果の報告等を行っている。
- 平成16年度の分析結果報告では、約90%の機関がホームページを活用した。(平成15年度では約80%)
- 平成16年度よりチャート類(クロマトグラム等)及び検量線をホームページから送付可能とした。約30%の機関が活用したが、多くは郵便等による送付であった。

- ホームページからの分析結果報告書の作成に関するアンケート調査を実施した。
- 用紙との比較では「ホームページがよい」が約90%。
- 作成時では「良い」が約60%。  
改良すべき」とした回答の主な内容は、以下のとおり。
  - チャート類の送付方法。
  - チャート類は、「PDF」以外（エクセル等）も可として欲しい。
  - 記入内容にわかりづらい部分がある。
  - エクセル等との関連があるとよい。

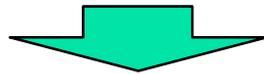
# 解析・評価の新たな統計解析

## (高度解析)

- 平成15年度に引き続き、平成16年度は、ガス試料の臭気指数、底質試料のフタル酸ジエチルヘキシルについて、統計解析手法を用いて実施した。
- 臭気指数
  - 系統的な誤差要因の特定：パネルの人的属性、測定場所などの分析条件、オペレーターによるものかの特定
  - 重回帰分析及び二段階の回帰分析
- フタル酸ジエチルヘキシル
  - 誤差要因の抽出
  - 「分析プロセスにおける要因の解析」：分散分析

# 室内精度の向上に向けた取組

- 基本精度管理調査項目の廃棄物試料 (Cd Pb As) について3回の分析を依頼

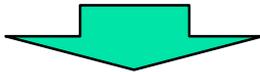
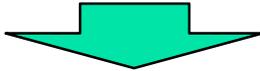


- 室内精度管理が室間精度管理に及ぼす影響について検討を行ったところ、PbとAsで室内精度と室間精度の間に傾向がみられた。

室内測定精度に関する解析例（砒素）

室内精度 C V %	回 答 数	平均値		室間精度	
		(mg/kg)	S.D.	(mg/kg)	CV %
1. 2未満	198	17.0	4.01	23.5	
2. 2以上 5未満	154	14.8	5.85	39.5	
3. 5以上10未満	38	15.9	6.01	37.8	
4. 10以上	9	13.4	9.19	68.4	

# 調査結果の公表

- 専用ホームページにより、調査結果の公表等を行った。
- 毎年度、調査結果報告書において各分析機関の分析結果の公表を行っている。  

- 公表により分析機関の評価と誤解され、機関評価の意味合いが強くなると、誤差の要因が把握できない等の弊害が生じる可能性あり。  

- 調査結果本文中に「各分析機関の分析結果は、分析機関の評価を示すものではない」旨を明記した。
- 分析機関のマイナス評価などに利用しているケースを発見した場合には、その旨の周知を図ることとする。

## 調査結果の信頼性の確保に向けた取組

- 平成 15年度では、社会的関心度が高いと思われる、ダイオキシン類分析用の土壌試料を4種類準備し、各参加機関に2種類をランダムに配布して調査を実施
- 平成 15年度の室間精度は、同じ土壌試料であった平成 11年度と大きく変わっていない。これは、分析技術は進歩しているものの、試料の配布方法を変えたため、改善の効果が相殺されたと考えられた。
- 平成 16年度では、1種類の土壌試料を配布して調査を実施。
- 過去よりも室間精度は、若干向上した。主に分析技術の向上と考えられた。

## ■ アンケート調査

- 外れ値等を示した機関に対して、試料ごとにアンケート調査を実施し、原因を調査した。
- 多数の機関が、アンケートにより、外れ値の原因を明確又は推測することができているとしている。
- ただし、各機関から報告された原因と添付資料等から推定される原因が異なる場合が見受けられた。

## ■ 現地調査

- アンケート調査で外れ値の原因又はその推定が不明であり、希望があれば、現地調査を実施した。
- 2機関が希望した。いずれも、廃棄物試料のCdが対象であった。
- 外れ値等の原因は、「ICP発光分光分析法における波長の選択が良くなかったこと」等であった。
- 現地調査後のアンケートでは、2機関とも「外れ値の原因がわかり、良かった」としていた。

# 5.平成17年度調査計画

- 調査項目については長期計画に基づき実施
  - 水質 (重金属類)
  - 水質 (芳香族化合物)
  - 大気 (VOC)
  - ばいじん抽出液 (ダイオキシン類)
- 情報システムの改善及びホームページによる分析結果報告
- 室内精度の向上に向けた取組 (水質試料の一部については3回の分析を依頼)
- 外れ値のフォロー (アンケート調査及び現地調査)

# 5.平成17年度調査計画

- 高度解析、これまでの解析例では、
  - 極端に外れた分析結果の発生要因の解析」  
「アンケート調査」等による個別調査が適当。統計的な手法では難しい。
  - 系統的な誤差の発生要因の解析」  
分析条件が多様であり 統計的な手法による要因の特定は難しい。
- 今年度調査項目での高度解析は実施しない
  - これまでの解析 評価の高度化のとりまとめ
  - 過去の結果を用いて 「分析プロセスにおける要因の解析」(16年度試行)を実施予定

# 6.平成17年度スケジュール



H1 6調査結果公表

H1 6結果説明会開催

調査機関公募

調査実施

集計作業

中間報告

解析作業

調査結果公表

6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 1月 2月 3月 4月 5月

## 注意事項

スケジュールは、解析状況等により変更があり得る

ご静聴どうも  
ありがとうございました。